鈴木主税

私の翻訳談義

ミシア
栄光と夢
THE DARK HALF
ダグラス・マッカーサー
ポール・ケネディ 21世紀の展望に備えて
ミシェル・フーコー
大いなる海へ
太平洋の悲歌
PACIFIC
人間性の医療
人間らしく死にたい
Die
情報喪失の時代
日米株式会社
U.S.-JAPAN, Inc.
大地の掟
自然の終焉
ベンジャミン・コール

鈴木主税

私の翻訳談義

河出書房新社

私の翻訳談義

1995年12月 5 日—初版印刷
1995年12月15日—初版発行

著者—鈴木主税

*

装丁—中島かほる

発行者—清水勝

発行所—株式会社河出書房新社
〒151 東京都渋谷区千駄ヶ谷2-32-2
電話—03-3404-1201〔営業〕03-3404-8611〔編集〕
振替口座 00100-7-10802

*

印刷—三松堂印刷株式会社
製本—加藤製本株式会社
© 1995 Printed in Japan
定価はカバー・帯に表示してあります
落丁本・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-309-01031-8

目次

プロローグ　5
1　翻訳の何が問題なのか――ある編集者との対話　17
2　忠実な翻訳という誤解――ある大学教授との対話　63
3　意味を読むということ――ある翻訳者との対話　113
4　欠陥翻訳書を買わないために――ある読書人との対話　165
エピローグ　207
あとがき　217

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbo

私の翻訳談義

プロローグ

翻訳についての本を書かないかと言われたことが、これまでにも何度かありました。そのつどお断わりしてきたのは、同じテーマの本がたくさんあるという、ごくありふれた理由からです。実際、翻訳に関する本は実に多く、あるとき気になって自分の手許にあるその種の本を数えてみたところ、ざっと百冊をくだりませんでした。いくら長いこと翻訳の仕事をしているからといって、翻訳に関する本を、出るそばから買い求めて読んでいるわけではないから、この世の中にはたいへんな点数が流布していることは言うまでもないでしょう。そして、翻訳に関する本の内容も多岐にわたっています。日本語と外国語の背景をなす比較文化論や比較言語論をはじめ、翻訳の技術や誤訳について取り上げたものなど、考えられるほとんどすべてのテーマが網羅されていると言ってもよく、それに日本語と外国語のそれぞれについて論じた本や注釈付きの語学テキストまで加えたら、気が遠くなるほどの数になるはずです。それなのに、また新たに翻訳の本を書

いて新味をだすことなど、一介の翻訳者にとって望むべくもありません。さらに、翻訳や英語と日本語についての自分の考えをあらためて検証してみても、そのほとんどは誰かがすでに言ったり書いたりしていることばかりです。とてもオリジナルな考えを打ちだせはしません。

そんなわけで、今回も、本を書いてはどうかというお話があったときは、とにかく「考えさせてください」とお答えしたものです。日本語の慣用では、右の返答で「ノー」と言ったことになります。それはともかく、まさにそんな問答をした翌日、散歩の途中で行きつけの書店に立ち寄り、なにげなくある翻訳書を手にしました。べつに翻訳についての本ではありません。フランスの学者の書いた社会科学の本です。そして、思わずその本を手から落としてしまうほどのショックを受けました。本を買う動機というのは、好きな著者とか気に入ったテーマとか、人によってさまざまでしょうが、書店でお目当ての本を手にしたとき、まず「あとがき」に目を通す人は多いようです。私もそんな一人で、このときも、まず「訳者あとがき」を読みはじめたのですが、そこに「この著者の文章を正確に訳そうとすると、日本語としてわかりにくくなる」という意味のことが書かれていたのです。

「ショックだなんて大袈裟な。翻訳書のあとがきによく出てくる感想ではないか。とりたてて驚くほどのことでもない」と思われる人が多いかもしれません。しかし、ちょっと考えてみると、これはまったくおかしなことです。翻訳者として、私はこれまでずっと「わかりやすい」日本語を書こうと努力してきたし、現在もそうしています。それでも、著者が伝えようとしているメッセージの「正確さ」を犠牲にしているつもりはありません。いつでも、著者の書いた文章の意味

をできるだけ正確に理解し、それをわかりやすい日本語にするために悪戦苦闘しているのです。あるいは、本の性格ということを考慮しなければならないのかもしれません。つまり、一般の読者がまず読みそうもない、アカデミックな、大学の授業のテキストにするような本の場合、いわゆるプロの翻訳者の手がける一般書とは違った態度で翻訳をするという意見もあるかと思います。なにしろ、教室で先生が説明するわけですから、日本語としてどうかと思われる翻訳でも（つまり原文を逐語的になぞった擬似日本語的な文章でも）かまわないといえば、かまわないのかもしれません（私はそういう専門書でも、できるだけ日本語としてわかりやすいものにすべきだと思っていますが）。しかし、自分の学生時代を振り返ってみるとき、原語の「正確さ」にこだわったそういう翻訳のおかげで、ずいぶん無駄な努力を強いられたと思わざるをえません。

ともあれ、「正確な」翻訳とはどういうことでしょうか。先の本の訳者は、どうやら辞書に出てくる単語の意味にのっとった訳語と、原語の文法に忠実な構文を「正確な翻訳」だと考えているようです。しかし、実際に自分でやってみればわかりますが、そんな態度で翻訳をしたら、日本語としてわかりにくくなるどころか、まともな日本語にすることすら難しいはずです。とにかく、たとえば英語と日本語という言語の性質が非常に違っている以上、そんなやりかたで普通の日本語への翻訳などできるわけがないことは、ちょっと考えてみれば誰にでもわかる理屈でしょう。翻訳というのは、そもそも言葉や文法を訳すのではなく、テキストの意味を移し変える作業のはずです。これは、日本語の難しい言葉をわかりやすく言いかえる場合（これも広義の翻訳だと言えます）でも、外国語を日本語に、あるいは日本語を外国語に翻訳する場合でも、つねに変

わらない原則です。言葉そのものの意味を正確かつ忠実に訳す必要があるのは、せいぜい外国語の辞典を翻訳するときくらいでしょう。

テキストの意味を訳すのが翻訳だと言いましたが、それはもとのテキストの意味をできるだけ過不足なく日本語にするうえで必要ならば、個々の単語の辞書的な「正確さ」を犠牲にしてもかまわないということです。事実、辞書にでていない訳語を考えだすことなどは、プロの翻訳者が日常的にやっていることだし、普通の辞書にはでていない、自分で考えだした訳語を集めて『英和翻訳表現辞典』[1]という本をつくった翻訳者もいます。また、文法的にも、もとのテキストの肯定文を否定文にしたり、疑問文を平叙文にすることなども、ごく当たり前に行なわれています。かつて、プロの翻訳者の手がけた翻訳を評して、日本語としては読みやすいけれども「語学的に」ルーズなところがあると指摘している文章を読んだことがありますが、これはまさに「さもありなん」と言うべきです。意味を正確に訳そうとしたら、語学的にルーズにならざるをえない場合に、翻訳者はしょっちゅうぶつかっているからです。あるいは、そういうやりかたに目くじらをたてて「誤訳」だと言う人もいるかと思いますが、普通の日本人に理解できない「日本語」を書くよりも、この種の「誤訳」のほうがずっとましだ、というのが私の考えです。

しかし、翻訳にたいするこうした態度は、あらためて言うほど目新しいものではありません。それは、日本で翻訳が行なわれるようになった初期のころから、多くの先人たちが実践してきたことであり、わが国のすぐれた翻訳は、すべてこういうやりかたから生まれたものだと言えるからです。また、こうした翻訳の方法論をめぐって、論争が起こったこともありました。私が記憶

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

しているかぎりで最も大きな話題になったのは、一九七八年に北御門二郎[2]という人がトルストイの『アンナ・カレーニナ』と『戦争と平和』の新訳をだして読みやすいという評判になり、それにたいしてこれ以前に同じ作品を翻訳している原卓也氏が、語学的な面から北御門訳にいくつかの問題を指摘して疑義を呈したことが発端となった論争です。[3]私は当時、ある出版社の翻訳部門と関係していたので、かなり強い関心をもって論争の推移を追ったものでした。しかし、この種の論争のつねとして、はっきりと黒白がついたわけではなく、またどちらが正しくてどちらが間違っているという結論をだしにくい事柄だということもあって、どういう結末になったのかは覚えていませんが、私見ではどうも北御門訳のほうに分があるようだとの印象をもったのを覚えています。

とにかく、翻訳とは言葉を訳すのではなく意味を訳すものだというのは、もはやことあらためて言うまでもない常識だと考えてもいいと思います。しかしこれは、もちろん、著者の書いた外国語の文章をまったく無視してもいいということではありません。ともあれ、先にある翻訳書の「訳者あとがき」を読んでショックを受けたと書きましたが、それは原文を正確に訳すと日本語としてわかりにくくなるなどとことわって、自分の翻訳について誰かに何か言われた場合の予防線をはっておこうとする人がまだいることに驚いたためにほかなりません。そして、いったんはお断わりするつもりだったこんな本を書く気になったのも、そのショックのしからしむるところなのです。

そうと覚悟を決め、あらためて考えているうちに、これ以前にも何度か同じような経験をして

いることに気がつきました。それらの経験については、このあとの本文でもふれるつもりですが、一度は大学教授をしている友人の経済学者から、こう聞かれたときのことです。「ある出版社から翻訳を頼まれたのだが、プロの翻訳者にうかがいたい。いったい、どれくらい忠実に訳したらいいのかな」。このときは遠慮のない友人のことでもあり（高校の同級生でした）、かなりはっきりと自分の意見を述べ、そんなことで迷うくらいだったら翻訳なんかしないほうが世のためではないか、などと身も蓋もない助言をしたものです。

また、もう一度は、ある大手電機メーカーから講演を依頼されたときのことです。その会社のメインフレーム・コンピュータのユーザーを対象とするセミナーで、翻訳について話してもらいたいということでした。二時間ほどしゃべったあと、型どおり質疑応答ということになりましたが、そのとき受講者の一人が、質問とも愚痴ともつかぬ、こんな発言をしたのです。「このコンピュータのマニュアルというやつですが、もうちょっとわかるように書けないものですかね」。素人にとって電子機器のマニュアルがわかりにくいことは承知していましたが、現場で実際にコンピュータを操作している人までがあのマニュアルに泣かされていると知って、本当にびっくりしました。これは十年以上も前のことで、当時のコンピュータのマニュアルは、コンピュータの先進国であるアメリカからハードのノウハウぐるみ輸入されており、当然、翻訳が介在していたわけです。一般書とコンピュータのマニュアルではずいぶん話が違うと思われるかもしれませんが、しかし翻訳の問題として考えてみると共通したところが多々あります。コンピュータに使われるプログラム言語というものには、COBOLとかPASCALなど何種類もあるようですが、い

ずれも英語が基礎になっています。したがって、ハードやソフトのマニュアルも英語の文章のスタイルを色濃くとどめています。そして、実際に翻訳されたマニュアルを読んでみると、カタカナの専門用語の羅列に「は」とか「が」のような日本語の助詞をつけ、日本語らしい語順に変えただけというものがおおかたでした。まさしく、先ほどの「正確に訳すと日本語としてわかりにくくなる」翻訳のサンプルのようなしろものばかりです。とにかく、その両方をひとことで評するとすれば、ほかならぬ「悪い翻訳」というしかないものなのです。

というわけで、この本の中心をなすテーマは、「悪い翻訳」ということになるでしょうか。なぜ悪い翻訳が生まれるのか、翻訳者と読者の立場から、また翻訳書のつくり手である編集者の立場から、それをどうしたらいいかを考えてみることが主眼になるでしょう。したがって、この本は翻訳の技術を教えるものでも、誤訳をうんぬんするものでもありません。それに、読んだからといって翻訳がうまくなるという本でもありません。また、先におことわりしたとおり、私の言うことは先人たちが繰り返し語ってきたことばかりです。私のオリジナルな考えなど、いくらもありません。それでも、先人に学んだことをあらためて繰り返そうとするのは、これから翻訳をしようとする人たちに、せめてこれくらいのことは認識しておいてほしいと思ったからです。

しかし、考えてみると、翻訳についてずいぶん多くの良書が書かれていながら、翻訳をしようとする人の認識が、多くの場合、テキストを正確に訳すことをもってよしとする態度のままだというのは、いったいどうしたことなのでしょうか。翻訳をしようという人だったら、翻訳について書かれている本の一冊や二冊は手にとってみようと思うはずですが、実際にはあまり読まれて

いないということなのでしょうか。それから、これは特にアカデミックな世界で仕事をしている人に見られることなのですが、「たかが翻訳」という態度が影響しているのかもしれません。その昔、編集者として、いまは故人となっているある人類学者に翻訳をお願いしにいったことがあります。幸い仕事は引き受けていただいたのですが、雑談をしていたとき、その学者がふと口にした言葉がいまでも忘れられません。「ぼくは翻訳の仕事が好きだし、とても勉強になると思っている。それで、翻訳を頼まれるとたいてい引き受けるのだが、陰口をきく人がいるんです。あの先生は翻訳だけはうまい、とね」。学者の世界では、どうやら翻訳という作業が本気で取り組むにあたらない片手間の仕事と見なされているらしい。とにかく、以上が翻訳の常識をここにあらためて語ろうと思ったゆえんです。なお、引用については、そのつど明記して私なりにコメントをつけるつもりですが、いつしか記憶にこびりついてしまって、自他の区別がつきにくくなってしまった考えやアイデアがないとは言えません。その場合には注記できませんが、そういうところがあったらお許しを願うとともに、どうかご指摘いただきたいと思います。

製造物責任ということがさかんに言われる昨今ですが、翻訳書については、ほとんどユーザーの身に危険がおよぶことがないせいか、一部の例外はあっても、あまり問題にされてはいないようです。そんなわけで、とても読めたものではない本を手にすることも、まだなくはありません。自分の訳すテキストがよく理解できていない翻訳者というのは論外ですが（まだそういう人の訳した翻訳書が横行していることは、たとえば『翻訳の世界』という雑誌に連載されている別宮貞徳氏の「欠陥翻訳時評」をちょっとのぞいただけでも明らかです）、一見してまともに見える

「悪い翻訳」は、さまざまなかたちで世にでているのです。それについては、読者が自衛するほかありません。不運にも悪い翻訳書を買ってしまったら、さっさと捨ててしまうにしくはないでしょう。読みにくい日本語、すんなりと頭に入らない日本語、またたとえば英語の構文がすけて見える、日本語とも思えない文章で書かれている本をがまんして読むことは、お金を損しただけではなく、お金よりも大事な時間までも損することになるからです。この本がそういう不幸を予防する一助にもなれば幸いです。

最後に、本書の表題についてひとこと。いまから三十年ほど前のことでしょうか、当時ある出版社で編集者として働いていた私は、作曲家の故芥川也寸志氏が書いた『私の音楽談義』[4]という本を読んで、たいへん感銘を受けました（文庫に入っているので、いまでも容易に入手できます）。その本の内容は、メロディー、リズム、ハーモニーなど、音楽の基礎理論を素人の読者にもわかりやすく解説するというものでした。しかし驚いたのは、お玉じゃくし――つまり音符――をいっさい使わず、適切な比喩やエピソードを駆使して複雑な音楽理論を誰にでもわかるようにやさしく説明していたことでした。そのことが記憶にこびりついていて、もし翻訳について何か書くとしたら、なるべく英語を使わないようにしたいということがずっと頭にありました。そもそも、縦組みの本に欧文の横組みがまじるというのはじつにわずらわしいものです。これは日本語で書かれる本文を横組みにしたところで読みにくさはあまり変わりません。とにかく、翻訳を生業（なりわい）として毎日横文字を読んでいる私のような人間ですらそうなのですから、一般の読者にとって、日本語と英語が混在する本の読みにくさは想像するに難くありません。そんなわけで、

この本ではやむをえない場合以外、英語の長い文章を引用することはつとめて避けました。また、アルファベットもできるだけ使わないことにし、英語を引用しなければならないときも、なるべくカタカナで表記するようにして、読者に読み下してもらえるようにしました。それで、せめてあやかりたいとの思いから、芥川氏の名著の題名を借用した次第です。芥川氏の軽妙な文章と趣味のよいユーモアを思うにつけ、内心忸怩（じくじ）たるものがありますが、無断借用を泉下の芥川氏にお詫びするとともに、読者にはそのことをお断わりしておきます。

注

（1）『英和翻訳表現辞典』中村保男・谷田貝常夫著、研究社、一九八四年。
『続・英和翻訳表現辞典』中村保男著、研究社、一九九四年。

（2）北御門二郎については『人生を闘う顔』中野孝次著、岩波書店同時代ライブラリーを参照。また「朝日新聞」一九九五年二月二十八日夕刊にも「訪問者絶えない北御門二郎さん」として取材記事が掲載されている。

（3）原・北御門論争は、『朝日ジャーナル』一九七九年十一月十六日号と十二月十四日号に掲載された原卓也の「トルストイ翻訳の現代的意味」が発端となり、それにたいして北御門二郎が「原卓也氏に答

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo